

高久 農業担当だった20年ほど前、十勝の畑は化学肥料を投入し過ぎではという記事を書いた。これだけ現在は肥料が高くなって、経済面でも土の力を引き出す意味でも、適正な肥料の使い方が非常に大事になっている。生産現場の肥料高騰の影響は。

一適正施肥でコスト3割減、収量は1割以上増

大葛 死活問題か、それを超えるレベル。この1年で、ビートなら1反（10アール）当たりの肥料代約2万円が2倍になった。収量で1トン分余りの販売額が減るのと同じで、もうけが飛んでしまう状況にある。

このためビートやジャガイモに比べて肥料を使わない大豆などにシフトする傾向が見える。先を考えると輪作体系や土壌バランスが崩れて作物が取れない恐れがあるが、余裕がなくて目先の利益確保に向いている印象を持っている。

高久 谷さんの研究に対する関心の高まり、環境の変化は。

谷 土壌や肥料に興味を持つ人は多くなった。講演依頼が増えて、雑誌への寄稿をまとめた本も出した。

そうした場で話すのは、肥料の3要素「窒素」「リン酸」「カリウム」は同列には扱えないということ。窒素は作物を大きく育てるには絶対に欠かせないが、リンやカリはそこまでではない。ジャガイモの施肥標準は、1反当たり窒素6キロ、リン20キロ、カリ11～12キロだが、これは無駄だと思う。

高久 その理由とは。

谷 十勝の歴史がある。もともと火山灰土の黒ボク土は世界的にも痩せた土壌で、春先は低温に悩まされた。そこにリンを入れると作物が取れやすかった。1950～70年と、化学肥



<おおくず・まさふみ>

1983年埼玉県生まれ。帯広畜産大学卒。2007年に北海道糖業に入社。浦幌町や足寄町などの耕作地500ヘクタールで主にビート生産を手掛ける関連会社、下浦農場に出向し、20年から業務部長。

料で土地の生産性が上がった。例えばジャガイモは、50年代で反2トンも取れなかったが今は3トン超。そのためデータを示して、今は肥料を減らせますと言っても簡単にはいかない。

大葛 畑の一角で比較試験を行い、抜き取り調査や反収、糖分、最終的なお金の勘定もして利益が出れば分かってもらえる。ただ恐ろしくてできないという考えが多いと思う。

谷 減らしてほしいのはリンとカリ。既に土壌に蓄積されて、植物が吸える状況になっている。カルビーポテトとの共同研究では、カリの施肥は「ゼロ」が一番育った。乳牛ふんの堆肥を与えて過剰にカリが入っているのに、さらに化学肥料で入れてしまっている。

高久 十勝は土壌診断の先進地と言われる。その活用法とは。

谷 十勝農協連や道総研が定着させたのは、非常に大きな貢献だった。ここまでまめに土壌診断を行う地域は日本にはない。そのおかげでリンとカリは、蓄積している圃場が多いと分かった。

大葛 下浦農場ではコストの割に収量が上がらない時期があったが、今は土壌分析の結果を施肥設計に生かし、ホクレンの協力でオリジナルの肥料を作ってもらい、必要な成分だけを入れるようにしている。取り組んで1年目からコストは3割程度減り、一方で収量は1割以上増えた。私が施肥設計している農家さんでも同等の効果を得られている。

単純に減肥するのではなく適正施肥が大切。あくまでも診断結果で畑の状態をきちんと見て、それに合った施肥をする。他の人がうまくいったから右にならえでは失敗しがちだと思う。

高久 土壌診断のデータをうまく使い、適正施肥ができれば、望む質量の作物が取れて逆風を乗り切れる地域だと感じた。

谷 十勝はポテンシャルのある地域。家畜ふ

